

〔書評〕

大滝紀雄著 『かながわの医療史探訪』

興政百年の記念出版物である『神奈川県史』（神奈川県史編集室編）は、三六巻におよぶ大部な歴史書であるが、医学や医療の歴史についてふれるところはまことに少ない。さきに発行された『神奈川県医師会史』においても、その前史として鎌倉時代以降、明治初年までの医療史が、石原明、大滝紀雄両氏によってまとめられているが、その書物の性格上概説的色あいの濃い記述のうえに、充分なスペースをさいていないことが物足りなさを感じさせていた。

このような空白をうめるにたる歴史書として、大滝紀雄氏によって本書が発刊されたことはよろこばしいかぎりである。昨年五月本会の第八回総会が横浜でひらかれた折、「歴史的にみた神奈川の医療」と題して会長講演がおこなわれたことは、われわれの記憶に新しいところである。その時の原稿に手をくわえてほとんど稿をあらたにし、さらに現場に足をほんで、自分の目でたしかめて正確をきして出版されたのが本書である。著者があとがきで「神奈川県の医療史をまとめて書いた本は差当って見当らない。そんな意味から、本書の果す役割もいささかあろうかと自負している」とのべているように、本書は神奈川県の医療史をくわしく知るうえでおおきな役割をはたしている。

本書は、一鎌倉時代以前の医療、二鎌倉時代の医療、三横浜開

港後の医療、四近世古文書が語る医療、五医療を物語る史蹟など、の五章にわかれる。第一章から第三章にかけては、時系列に配された神奈川の医療の流れがしるされている。第一章、第二章はわずかに二五ページにすぎず、神奈川県がこのころの事蹟にとほしい一つの証左といえるかもしれないが、それだけでなくまだ研究業績にとほしいことによるのかもしれない。著者もその点については、「金沢文庫の医学的研究がなされた晩には、鎌倉時代の医療の様子も解明され、医学史に寄与する点が極めて大きいであろう」とのべ、今後の研究におおきな期待をかけている様子がうかがえる。

この地においては鎌倉時代の光芒があまりに輝かしいものであったためか、「鎌倉時代ほど社会事業を中心として民主化された医療が栄えた時代は、日本の医療史中にも見出すことが出来ない」（傍点は評者）と著者がのべているのは、いささか筆がはしりすぎてしまったといえようか。このような記述をした著者の氣持を理解できないわけではないが、この点についてはさらに検討がくわえられなければならないであろう。

第三章の横浜開港後の医療については、著者のもっとも得意とする分野だけに、まさに本書中の圧巻で、ひろく史料にあたってこれを理解しやすくまとめたその力量には、感嘆のほかはない。とくにジュイムズ・ヘボンの医療面での功績についての筆致は、「ヘボン博士顕彰会」の中心人物として活躍している著者だけに一層の冴えが感ぜられる。

第四章は地方文書としての大内家文書や関口日記を資料とし

て、「これまでほとんど見落されていた、新しい研究分野」（本書のまえがき）にメスをいれた業績として注目にあたいたいものである。しかしこれとても充分に解明の手がくわえられたわけではなく、著者によってさらにくわしい解析がなされるのを心から期待している。

第五章では神奈川県に関係ある医人として、杉田玄白、野口英世などをとりあげ、その人達の足跡をおって医療史の一駒を浮き彫りにしている。その見出しを列挙してみると、「野口英世と横浜検疫所」「長与専斎と鎌倉」「松本良順と大磯海水浴場」「葉山海岸のベルツの碑」「稲村ヶ崎コッホ記念碑」「杉田玄白と磯子区杉田町」などである。

横浜市西区医師会長や県支払基金審査委員などの要職にあり、開業医としても盛業の著者が、このような密度の濃い著書をまとめたことにはたいして深く敬意を表するものである。標題は『かながわの……』であつても、ひろく各地の蘭学に通ずる内容をもっているので、わが国の医学の発展をあとづける好個の資料となるにちがいない。秋山書房（横浜市磯子区森三三一一七）、B 6判・一七六ページ。定価一三〇〇円。

（深瀬泰旦）

雑報

正誤表

第三十巻一号

深瀬泰旦「川崎市蟹ヶ谷にある幕府医官人見氏の塋域」

ページ	行	誤	正
十八・十九	訂正箇所多い為別紙を添付		
三十	三	〇	先

第三十巻一号

添川正夫「牛痘種痘法奨励の版画について」

ページ	行	誤	正
六二	終りより七行目	示令を	止令を
六七	一行目	アモイ	マカオ
七〇	終りより四行目	宗健	宗建
七一	最終行	迷を疾りて	迷をさりて
七七	六行目	嘉永三戌年	嘉永三戌年
八一	終りより七行目	待医	侍医
八二	終りより二行目	桑田立親	桑田忠親
八三	六行目	桑田立親	桑田忠親
	三行目	vaccination	vaccination